

# 花粉症 大気汚染で猛威

花粉症が猛威をふるっている。都内の三・五人に一人が花粉症に苦しんでいるという。「こちら特報部」でも、記者の半分がマスクに頼ってすごしている。今季は例年の二倍近い飛散量になると予想されているが、それに加えて、最近の研究では大気汚染が花粉症のリスクを高めることが指摘されている。気が抜けない状況が続く。(中山洋子)

このところ首都圏の「が多くなりそう」(都健花粉予報マップは連日、康保険課)。花粉の飛散ほぼ「極めて多い」を示量がシーズン中の累計です真つ赤な色に塗りつぶ一立方びあたり二千個以上になると、花粉症に十分に注意することが必要とされる。今季は東日本昨年二月から三月月半を中心、この目安を大の情報提供期間で三十五万三千件だったのが、今年一月半ですすでに四の都市別の予測では、水十三万三千件(今月二十日現在)に達している。花粉が多い年は当然、花粉症の患者も増える。「これまでの傾向を見ると、今年も症状が出る人

## 被害広げる仕組み解明



最多で、群馬県高崎市や宇都宮市などが続く。東京都千代田区も七千七十個と前年比で約五倍。過去十年の平均値と比べて

で姿京ど策なクマ、花粉増えた人たちの都

も、一・八倍の大量飛散になるという。

NPO法人「花粉情報協会」の佐橋紀男事務局長によると、飛散が少な

い年の翌年は増える傾向にある。それと、猛暑の翌年も大量飛散しやすいという。「近年は冷夏の年がなく、過去十年の平均値は一九九〇年代より増えている」。林業の低迷でスギ林の間伐や伐採が進まないため、花粉をつける三十年以上のスギも増える一方だ。

さらに「悪い知らせ」が届いている。大気汚染との絡みだ。車の排ガスなどのほか、中国から飛来する微小粒子状物質PM2.5の影響が心配されている。

埼玉大大学院の王青羅准教授(環境制御工学)らの研究で、PM2.5が花粉を爆発させ、被害を広げるメカニズムが徐々に分かってきた。

これまで花粉症の原因物質は、約三十種類のスギ花粉そのものと思われていた。しかし、原因のアルレルゲンは花粉の表面や中にある一以下の粒に含まれている物質だったことが分かった。王准教授は「花粉が大気中のPM2.5にくっつく」と、破裂し、アルレルゲンの粒が飛び出しやすくなる」と説明する。

アルレルゲンの粒は空中に一週間以上も滞留するばかりか、車の走行などで繰り返し舞い上がっているという。「きれいな空気でも二割の花粉から微小なアルレルゲンが飛び出す、汚染された大気では、それ染された大気では、それが八割に上る。去年の四五倍の花粉があるとすれば、汚染された大気中ではアルレルゲン物質の量は数十倍にもなる」

王准教授は「微小なアルレルゲンは気道から肺にも侵入し、花粉症ばかりかせんそくの引き金にもなる」と警告。花粉症対策には目先のスギ花粉のみならず、大気汚染の解消が急務と訴えている。

花粉 + PM2.5 ↓ アレルゲン大量放出

二エースの追跡